

Title	中国共産党史
Author(s)	田中, 仁
Citation	
Issue Date	2016-10
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/76707
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

第2章 中国共産党史

田中仁

§ 研究状況

人民共和国成立後、毛沢東文献をふくむ共産党史史料の収集と編纂は、毛沢東選集出版委員会と党史資料室のもとで始まった。1951～1953年と1960年に『毛沢東選集』4巻までが公刊され、また『党史資料』24期が刊行されたが、1950年代末以降の中国政治の急進化と文化大革命によって、停止・頓挫を余儀なくされた。

共産党中央の機構で党史研究にかかわるのは、中共中央文献研究室と中共中央党史研究室である。中央文献研究室の前身は1977年に華国鋒によって組織された毛主席著作編輯委員会、1980年にその辦公室が中央文献研究室と改名した（主任・胡喬木）。該室は、(1)『周恩来選集』（1980）のあと劉少奇、朱徳、鄧小平らの選集・年譜・伝記、(2)『三中全会以来』など中共中央の重要文献集、(3)『建国以来重要文献選編』『建国以来毛沢東文稿』などの共和国成立以来の重要文献を刊行した。同時に歴史決議の起草工作にかかわるとともに関連史料の編輯に携わり、後に『關於建国以来党的若干歷史問題的決議注釈本』を出版した。さらに1991年には、『毛沢東選集』第2版を出版、続いて『毛沢東文集』8巻を刊行した。

1980年、中央党史委員会が成立、党史編審委員会のもとに党史研究室が設置された。その最も重要な任務はオフィシャルな党史編纂であり、1982年に研究室主任となった胡繩が中心的役割を担った。『中国共産党歴史』上巻や『中国共産党的70年』は、中央領導指導小組の批准を受けた該室の著作とし

て刊行された。

1987年の「中華人民共和國檔案法」によって、共産党関連文書が公文書の一部であることが確認された。さらに1993年、公文書を所轄する国家檔案局と結党以来今日にいたる党・中央政府各機関の重要文書を保管する中央檔案館が合併し、共産党中央直属の下部機構となった。中国における共産党史関連史料の整理と公刊は、こうした環境のもとで展開し今日に至っている。

郭徳宏は、今日の中国には、共産党の観点から研究・叙述するオフィシャルな共産党史、客観性を重視して学術性を追求する学者の共産党史と、個人的関心から自由に研究・叙述する民間の共産党史という三種類が存在するという⁽¹⁾。1950年代共産党史の論争点について、韓鋼（2008）は、朝鮮戦争の問題、過渡期の総路線と社会主義改造の問題、「高崗・饒漱石事件」の問題、反右派闘争の問題、「大躍進」と人民公社化の問題、1959年の廬山会議の問題を掲げているが、これは中国における学術研究としての歴史学の課題のことである。1950年代共産党史に関わる学術研究として楊奎松（2009）、林蘊暉（2009、2008）、沈志華（2008）を、また民間の共産党史として、大躍進運動の実態を調査・討究したジャーナリスト楊継繩（2011、2012）を掲げる。

共産党史研究に関する全般的な研究動向については、劉書楷ほか編（2006）、羅平漢ほか（2013）などで知ることができる。定期刊行物として中央文献研究室・中央檔案館の『党的文献』、中央党史研究室の『中共党史研究』、『百年潮』、当代中国研究所の『当代中国史研究』などがある。

1991年のソ連邦崩壊に起因するソ連邦・ソ連共産党関連史料の公開は、1950年代共産党史研究に新たな条件と可能性をもたらした。沈志華（1998）は、これら新史料を用いた朝鮮戦争研究であり、ロシア人研究者パンゾォフによる潘佐夫（2015）は毛沢東の評伝である。

日本国際問題研究所中国部会編（1963～1971）、同（1973～1974）は、1950年代中共党史に関する基本文献を日本語訳した史料集である。同（1970～1975）をふくめて、結党前夜から1950年代にいたる中共党史の基本史料が日本語訳

された。今堀誠二（1966）は『毛沢東選集』所収文書を初出形態に立ち返って検討していたが、1917～1949年の毛沢東の著作429篇の初出テキストを収録する『毛沢東集』全10巻（1970～1972、1983第2版）は、『毛沢東選集』所収テキストとの異同を逐一注記する。

マックファーカーほか編（徳田教之ほか訳）（1992～1993）、宋永毅編（2002～2014）と楊海英編（2009～）はいずれも、もともと中国でさまざまなかたちで流通していた史料群をもとに、アメリカ、香港、日本で整理・公刊されたものである。したがって、それは、中国におけるオフィシャルなそれとは異なるもうひとつの史料の整理・公刊であり、歴史研究においては前者を補充しうる極めて重要な意義を有している。日本における1950年代共産党史関連の学術研究として、朱建栄（1991）、杜崎群傑（2015）を掲げる。また陳永發（2001）は、台湾の研究者による共産党史研究である。

§ 史料紹介

（1）毛沢東関連史料

毛沢東は、読者に内容・叙述の両面で完璧なテキストを提供したいと考え、自らの著作に系統的な改訂を加えた。人民共和国成立後に編纂・出版された『毛沢東選集』（人民出版社、1952～1960）に収録された文章に、彼自身の同意とリーダーシップのもとで系統的な補充と改訂が施されていたことはよく知られている。このことは、たとえば1945年の歴史決議を『毛沢東選集』の「付録」として収録する際にも事情は同じで、当時の情勢をふまえた事後的な加筆がなされたことが、その制定過程とともに80年代の研究で明らかにされた⁽²⁾。毛沢東なき後、「二つのすべて」（毛沢東が行ったすべての決断を断固堅持しすべての指示に一貫して従う）を掲げる華国鋒指導部による『毛沢東選集』第5巻（人民出版社、1977）は、1949～1957年の重要著作70篇を収録して1977年4月に刊された。収録されたテキストなどについての疑義を収める有効なロジックを欠き、華は「真理の基準」論争に敗北する。このことは

第5巻のイデオロギー的正当性の喪失を意味していた。

1991年、『毛沢東選集』の注釈部分を改定した第2版（全4巻、人民出版社）が刊行された。この後、毛沢東生誕100周年を記念して刊行を始めた『毛沢東文集』全7巻（人民出版社、1993～1997）は、1921～1976年の文稿を「改訂を行わず、誤字・脱字は注記を付す」かたちで収録する。また『建国以来毛沢東文稿』全13冊（中央文献出版社、1987～1998）は、（1）手書き文書（文章、指示、講話要綱、コメント、書簡、詩詞、文書への加筆）、（2）彼自身が認可した講話や談話記録、（3）彼自身が認可し彼自身の名前で出されたその他の文書を収録する。さらに『建国以来毛沢東軍事文稿』全3巻（軍事科学出版社ほか、2010）は、電報、指示、講話、談話、書簡、題辞など821篇を収録する（91篇が初出）。このほか『毛沢東軍事文集』全6巻（軍事科学出版社ほか、1993）、『毛沢東西蔵工作文選』（中国文献出版社ほか、2008）、『毛沢東新聞工作文選』（新華出版社、1983）、『毛沢東文芸論集』（中央文献出版社、2002）などがある。

さらに『毛沢東年譜：1893～1949』全3巻（中央文献出版社、2002）、『毛沢東年譜：1949～1976』全6巻（中央文献出版社、2013）、『毛沢東伝：1893～1949』（中央文献出版社、2004）、『毛沢東伝：1949～1976』全2巻（中央文献出版社、2008）が刊行されている（いずれも中共中央文献研究室編）。これらは中央檔案館が所蔵する一次文献をふくむ多様な方途のもと精緻な考証による編纂がなされている。

（2）指導者の選集・文稿・年譜・伝記

中央文献編輯委員会・中央文献研究室などによる毛沢東以外の指導者の選集・文稿・年譜・伝記のなかで、1950年代党史研究に関連する著作を掲げる。

・選集：『周恩来選集』全2巻（人民出版社、1980）、『周恩来軍事文選』全4巻（人民出版社、1997）、『周恩来統一戦線文選』（人民出版社、1984）、『劉少奇選集』全2巻（人民出版社、1981、1985）、『朱徳選集』（人民出版社、1983）、『鄧小平文選』全3巻（人民出版社、1993）、『陳雲文選』全3巻（人民出版社、

1995)、『彭真文選：1941～1990』(人民出版社、1991)、『葉劍英選集』(人民出版社、1996)、『万里文選』(人民出版社、1995)、『李先念文選：1935～1988』(人民出版社、1989)、『薄一波文選：1937～1992』(人民出版社、1992)。

・文稿：1949年6月～1950年10月の文章、電報、書簡、コメント、題辭約1000編を収録した『建国以来周恩来文稿』全3冊(中央文献出版社、2008)、1949年7月～1955年12月の文稿約4000篇を収録した『建国以来劉少奇文稿』全7冊(中央文献出版社、2005、2008)、1949年7月～1992年2月の各種文稿約800篇を収録した『建国以来李先念文稿』全4冊(中央文献出版社、2011)。

・年譜：『周恩來年譜：1949～1976』全3卷(中央文献出版社、1997)、『劉少奇年譜：1898～1969』全2卷(中央文献出版社、1996)、『朱德年譜：1886～1976』新編本全3卷(中央文献出版社、2006)、『鄧小平年譜：1904～1974』全3卷(中央文献出版社、2009)、『陳雲年譜：1905～1995』全3卷(中央文献出版社、2000)。

・伝記：『周恩來伝：1898～1976』全2卷(中央文献出版社、2008)、『劉少奇伝：1898～1969』全2卷(中央文献出版社、2008)、『朱德伝』修訂本(中央文献出版社、2006)、『陳雲伝』全2卷(中央文献出版社、2005)。

(3) 『建国以来重要文献選編』と『中共中央文件選集』

『建国以来重要文献選編』全20冊(中央文献出版社、1992～1998)と『中共中央文件選集：1949年10月～1966年5月』全50冊および総目録(人民出版社、2013)は、1950年代共産党史を研究するための標準的な史料集である。前者は、人民共和国内立から文革前夜にいたる時期の共産党中央・全国人民代表大會・政務院と國務院・中央軍事委員会が出した基本文献、それらが各所轄部門に示達した重要文献、中央の指導者・部門責任者が発表した重要講話・文章、中央の意向を伝達する重要な社論、および歴史的に少なからず影響を与えたあるいは重要な理論的意義を有する非公式文献・講話記録を収録する。後者は、共産党中央政治局・中央書記処の文献、中央の重要会議の文献、共産党中央とその他の機構が連名で出した文献、および中央文献と密接

な関係を有する一部の文書・電報を収録する。

なお、これらに対応する結党から人民共和国成立までの時期を対象とする史料集として、『建党以来重要文献選編』全26冊（中央文献出版社、2011）、『中共中央文件選集』全18冊（中共中央党校出版社、1989～1992）がある。

（4）『中国共産党歴史』と中国共産党歴史資料叢書

人民共和国成立以前を対象とする1巻と、成立以降1978年12月までを対象とする2巻からなる中央党史研究室『中国共産党歴史』全4冊（中共党史出版社、2002、2010）が、中国におけるオフィシャルな共産党史とされる。このほか、中央党史研究室の著作には、『中国共産党簡史』（中共党史出版社、2001）、『中国共産党的70年』（中共党史出版社、1991）、『中国共産党歴史大事記』（人民出版社、2011）、『中国共産党的90年』全3冊（中共党史出版社ほか、2016）などがある。また中央党史研究室が主管する中共党史人物研究会（1979年成立）は、全100巻を予定する『中共党史人物伝』全89巻（陝西人民出版社ほか、1980～）、『中国人民解放軍高級将領伝』全40巻（解放軍出版社、2007～2013）を刊行した。

1980年各地区各単位の「党史資料徴集工作」の指導、党史資料の収集・整理を目的として中央党史資料徴集委員会がつくられた（1988年中央党史研究室と合併）。大量の文献史料・口述史料や実物史料が収集され、「中国共産党歴史資料叢書」、「中国人民解放軍歴史資料叢書」として多くの史料集が編纂・出版された。たとえば、「中国共産党歴史資料叢書」の『城市的接管与社会改造：瀋陽卷』（遼寧人民出版社、2000）、『“三反”、“五反”運動：江蘇卷』（中共党史出版社、2003）、『中国資本主義工商業的社会主义改造：広東卷』（中共党史出版社、1993）、『中国共産党与少数民族地区的民主改革和社会主義改造』（中共党史出版社、2001）、『“大躍進運動”：福建卷』（中共党史出版社、2001）、『撥乱反正：内蒙古卷』（中共党史出版社、2008）、「中国人民解放軍歴史資料叢書」の『中国人民解放軍組織沿革』（解放軍出版社、2002）、『解放戦争時期国民党軍起義投誠：川黔滇康藏地区』（解放軍出版社、1996）、『剿匪闘争・

中南地区』（解放军出版社、2006）など。

(5) 新聞と雑誌

共産党中央委員会機関紙『人民日報』は、1948年華北局機関紙として創刊、翌年党中央委員会機関紙に昇格した。全中国の報道機関の頂点に立ち、報道内容は直接党・政府の政策・方針を反映し、中国を知るうえでも最も有力な新聞であるが、反面、党中央の権力を握る勢力や首脳の方針に左右される傾向が強い。『光明日報』は、1949年に中国民主同盟機関紙として創刊、1957年から共産党の中央宣伝部と統一戦線工作部の指導下に入った。人民解放軍機関紙『解放軍報』は1956年創刊、解放軍総政治部の指導のもと解放軍報社が編集・発行する。

『新華月報』は内政・外交にわたる重要な文献・史料を集めた月刊誌。1949年人民政府出版総署により北京で創刊。党と政府の重要文献はもちろん、指導者の講話と文章、中央の有力新聞・雑誌の社説、調査報告や経験の総括なども掲載されるため参考価値が高い。1958年創刊の共産党中央委員会発行の政治理論誌『紅旗』は党中央の路線や方針と厳格に一致することが強く求められ、『人民日報』とともに最も権威のある雑誌とされた（半月刊～月刊）。1988年に停刊、その役割は『求是』に引き継がれた。『新華社新聞稿』（1950～1956）は国営の通信社・新華通信社による配信原稿の摘録である。

人民共和國成立後、大行政区はそれぞれ党機関紙を発行していた。省級の党機関紙は、『解放日報』（上海）、『南方日報』（広東）、『新華日報』（江蘇）、『大衆日報』（山東）を除いて省（自治区・市）名を冠する名称であった⁽³⁾（【解題1】）。また1950年代に発行されていた市級の党機関紙には、『石家荘日報』『瀋陽日報』『南京日報』『杭州日報』『合肥晚報』『南昌日報』『濟南日報』『鄭州日報』などがある。

(6) 組織史資料

中共中央組織部ほか編『中国共産党組織史資料：1921～1997』全9巻およ

び附巻全4巻（中共党史出版社、2000）は、共産党結党から1997年の共産党第15回全国大会にいたる時期の共産党中央とその指導下にある政権・軍隊・統一戦線・大衆団体の組織に関する史料集である。各組織の沿革と名称の変化、および構成員の在職期間を記す。1950年代に関連するのは、5巻（過渡時期和社会主義建設時期）、9巻（文献選編・下）、附巻1（中華人民共和國政権組織）、附巻2（中国人民解放軍組織）、附巻3（中国人民政治協商会議組織）、附巻4（中華人民共和國群衆団体組織）である。1984年から中央党史資料徵集委員会を中心に編纂作業が進められたが、1988年の党史研究室改組の後、共産党の中央組織部が主導的役割を担うことになった。この史料集（中央巻）刊行から1999年までに、中央、省、地区、県4級3067部の組織史資料が出版された（【解題2】）。組織史資料の編纂作業は、現在も引き続き進行している。

（7）共和国史編年

当代中国研究所は、人民共和国史に関する研究・編纂・出版と関連史資料の収集と整理を目的として1990年に設立された。『中華人民共和国史編年』（当代中国出版社、2004～）は当代中国研究所による編年体歴史書で、各年1巻とし、これまでに「1949年巻」から「1962年巻」までの全14巻が刊行されている。（1）月日と史事を明示する「綱文」、（2）大事始末を叙述する「目文」、（3）重要人物のプロフィールと諸説が存在する際の「注釈」、（4）「文献」、（5）「図」からなる。

（8）回想録

人民共和国成立期の財経委副主任・財政部長であった薄一波『若干重大決策与事件的回顧』上下（中共中央党史出版社、1993）は、1980年代党中央に対する報告書をまとめた。人民共和国成立期の共産党統一戦線部長である李維漢『回憶与研究』全2冊（中共党史資料出版社、1986）は、病床での聞き取りを整理・編集された。李銳『廬山會議実録』（春秋出版社、1989）は、毛沢東の秘書を兼務していた著者による廬山會議の記録である。師哲『在歴史巨人

身辺：師哲回憶録』（中央文献出版社、1991）は、人民共和国初期に毛沢東ら中共指導者のロシア語通訳を務めた著者の回想録である。胡喬木『回憶毛沢東』増訂本（人民出版社、2004）は、1940年代初めから毛沢東の秘書をつとめ、また1980年代には歴史決議の起草工作にも携った著者による談話・報告を収録する。

（9）海外における整理と公刊

沈志華編『俄羅斯解密檔案選編：中蘇関係』全12巻（東方出版中心、2015）は、ソ連崩壊後のロシアで公開された1945～1991年の中ソ関係に関する文書2262件（と付属文献363件）を中国語に訳出する。2巻から9巻が1950年代を対象としている。

京都大学人文科学研究所『毛沢東著作年表』（京都大学人文科学研究所、1980～1981）は、上巻（年表篇）と下巻（語彙索引篇）からなる。上巻は、人民共和国が成立した1949年から毛沢東が死去した1976年にいたる著作（論文・手紙・批示・詩文などの執筆著作と、講話・談話・口頭指示などの口述著作）について、年月日、動態、典拠を記す。下巻は、『毛沢東思想万歳』甲・乙・丙・丁本および『毛主席文選』の解題、収録著作・参考文献一覧、人名・事項索引からなる。

マックファーカーほか編『毛沢東の秘められた講話』（岩波書店、1992～1993）は、百花斉放期と大躍進期における毛沢東の未公開発言の日本語訳である。原著（MacFarquar 1989）は、アメリカの研究機関が収集した共産党関連史料から1957年と1958年の毛沢東発言19篇を英訳して収録する。邦訳では、この英訳テキストを参照しながら典拠となった中国語の原典からの翻訳を行うとともに、（1）毛沢東著作年表（1934～1968）、（2）19篇に関わるテキストの異同を整理する。

「中国当代政治運動史資料庫：1949～1976」は、宋永毅（カリフォルニア州立大学ロサンゼルス分校図書館）を中心に、アメリカ在住の中国系研究者が中台の学者とともに構築したデータベースで、（1）6,749篇をおさめる「中国

文化大革命資料庫：1966～1976」(香港中文大学中国研究中心、2002)、(2) 10,102篇をおさめる「中国反右運動資料庫：1957～」(香港中文大学中国研究中心、2010)、(3) 6,024篇をおさめる「中国大躍進一大飢荒資料庫：1958～1962」(香港中文大学中国研究中心、2013)、(4) 9,089篇をおさめる「中国50年代初中期政治運動資料庫・從土地改革到公私合營：1949～1956」(美国哈仏大学費正清中国研究中心、2014) からなる。中央と地方の公文書、指示や公報、指導者の講話、報道機関の社論、さらにさまざまな言論を集積する。また宋永毅編『反右絶密文件』全12巻(国史出版社、2015)、同編『千名中国右派的处理結論和個人檔案』全6巻(国史出版社、2015)は、反右派運動についての史料集である。

内モンゴル地域の文化大革命関連史料をリプリント版として収録する楊海英編『モンゴル人ジェノサイドに関する基礎資料』(風響社、2009～)から、1950年代内モンゴル地域の軌跡を照射することができる。

§ 史料解題

1. 省級党機関紙の特徴

人民共和国成立期の省級党機関紙の特徴について、丁淦林・陳巧雲は次のように概括している。(1) 大多数の機関紙は「解放」直後に創刊された(『黒龍江日報』『天津日報』など)、(2) 少数の機関紙は共和国成立後に創刊された(『新疆日報』『雲南日報』など)、(3) いくつかの機関紙は共和国成立以前に創刊、成立後も継続して刊行された(『大衆日報』『陝西日報』など)、(4) 漢語以外の版をもつものがあった(『内蒙古日報』モンゴル語版、『西藏日報』チベット語版、『新疆日報』ウイグル語版・カザフ語版・モンゴル語版)(5) 毛沢東が題字を書いた(『浙江日報』『安徽日報』は例外)。

2. 県級史料(組織史資料と県史)

組織史資料は、「中央巻」とともにすべての省・地区・県で編纂・刊行さ

れた。県級の史料も「中央巻」と同様の構成・内容を有している。例として、『中国共産党山西省黎城県組織史資料：1937～1987』（山西人民出版社、1993）の内容を紹介する。①中共組織史資料（a.抗日戦争時期、b.全国解放戦争時期、c.基本完成社会主義改造和開始全面建設社会主義時期、d.“文化大革命”時期、e.社会主義現代化建設新時期）、②政権系統組織史資料、③軍事系統組織史資料、④統一戦線系統組織史資料、⑤群衆団体系統組織史資料、⑥県直各单位組織史資料、⑦各行政村組織史資料。これに対して1980年代末～2000年代初めに編纂・刊行された県史には、県レベルにおける中共党史関連の具体的な情報を有していることは言うまでもない。例として、河北省の『涿源県志』（新華出版社、1998）の内容を掲げる。①地理、②人口、③経済、④政治、⑤軍事、⑥文化、⑦民情習俗、⑧人物。

組織史資料と県史によって、1950年代中共党史に関わる県レベルの実態を知りうるとともに、各県の比較を行うことが可能となった。その際、楊繼繩（2012）が『通渭県志』（甘肅省）を事例として、「大飢饉の時代に権力を握っていた幹部たちが、もし1980年代も継続して現地で政務を掌握していたり、中央で重要な職務についている場合、その地方の人口や歴史をめぐる記載は改竄されている可能性がある」と述べていることにも留意したい（415頁）。

【注】

- (1) 郭徳宏「11届3中全会以来中共党史学理論和方法研究的新進展」（『党史研究与教学』2002年第2期）。
- (2) 胡喬木回憶毛沢東編写組「胡喬木談党的歴史決議」（『中共党史研究』1994年第2期）、龔育之『党史札記』（浙江人民出版社、2002）205～207頁。
- (3) 丁淦林・陳巧雲「中国共産党党報史略」（『新聞記者』2001年第7期）。